

に出るようになって、今ではすっかり治りました。おかげさまで、現在はもう何も後遺症はありません。

## 死の回帰熱そして帰還

石川県 中川 政義

私は、昭和十九年の三月に金沢の東部五二部隊に入隊しまして、現役ですけれども、それから一週間後に満州の方へ渡ったのです。満州の方は牡丹江から東寧、東寧から羅子溝、そういうところを点々として所属していたわけです。新京の方へ分遣したこともあるわけなんです。新京の警備学校ですけれども、そこへ分遣していたときに終戦を迎えたわけです。それで、原隊復帰を命ぜられて、帰る途中豆満江の川で、図們の付近なんですけれども、その川ぞいで武装解除されて抑留されたということでございます。

収容先は、コムソモリスクにほとんどいたんですけれども、二十二年の十月ごろにナホトカへ来ました。ナホ

トカですぐに帰るようなあんばいだったんだけど、運悪くまたウラジオストックの方へ転属を命ぜられて、約一か月間、そこからそれでまたナホトカへ戻りまして、舞鶴へ渡ったという大体のあらましでございます。

作業の方は、コムソモリスクでは一貫して建築作業に従事していたわけです。建築作業といっても非常に幅が広くて、最初は穴掘りから、左官、れんがづくり、大工作業、そういった細かいところまでつくられていたんです。

私どもは体があまり調子がよくなかったものですから、終戦後抑留されてから、二十一年一月前後にかけて、いわゆる栄養失調に少しなり、また栄養失調のほかに回帰熱という、熱発黄疸なんですけれども、こういう病気にかかりまして、約二か月ほど入院の経験があるわけです。この回帰熱というのは、その収容所でも約三分の一がこれによって亡くなったということを目のあたりに見えてきたわけですけれども、一時は梟場の穴掘りを仕事にしなければならなかったということもあったわけです。収容所の倉庫には、死体を着物を着せたまま放った

らかにして積み上げていたということが目のあたりに浮かんでくるわけです。そういうみじめな死に方をして、就寝しまして、あくる朝点呼にこなかったら死んでいるのかなということですから、約三分の一が回帰熱と栄養失調で亡くなった事実を目のあたりに見ているわけです。

私も回帰熱にかかっちゃって、二十一年一月前後にあそこの病院で、収容所近くの病院があるわけですけれども、そこに入院していたということでございます。入院のときには、仕事こそは、作業こそはしなくても、あそこにいるときはシラミがいっぱいわいて、シラミ取りが仕事だったということしか記憶がないんです。しばらくの間、棄せてもらったわけです。退院後は特別扱いを受けまして、農村のいわゆるコルホーズといった農業、それから駅の警備といった仕事をまかされて、少しは楽になっていたんですけれども、それがだんだん経過しますと、先ほど申しましたような建築作業に従事していたということになります。最後に私は建築作業の中に八十八組と、いろいろ組があるんですけれども、八十八

組の組長もやらされて、どこがよかったか知りませんけれども、私の組の中に大工さんがいたものですから助かって、私がソ連の方との折衝をしていて、できるだけノルマをあげることに配慮していたんです。そういう私の班の中に優秀な方々がおられた関係から、私が運よくハラショーラポータで帰ってきたということなんです。その点は私も感謝しているんです。

ウラジオオの方ではもっぱら水道工用の穴掘り、そういう作業をやっていて、ここではないわゆる思想教育がほとんどだったんです。日本新聞、これはもちろん収容所の中でも日本新聞はありましたけれども、共産主義が浸透しないことには帰さないとか、そういうことです。いろいろあるんですけれども、そういう思想教育に重点をおかれていたということではないかと思えます。

それから、食べ物についてですけれども、食べ物はいわゆる段階がございまして、ノルマの上達いかんによって、食べ物を与えていたことを記憶しております。食べ物は、私も非常に今でも記憶はあるんですけれども、本当に黒パンと副食はおかゆを、ラード缶といっ

たけれども、その缶詰の缶に一杯少々あって、それから  
お魚というのは、生魚はほとんど食べられないという。  
キューキューという小魚と、野菜については、キャベツ  
とかバレイショというようなある程度限られている食事  
でございました。ウラジオストックで初めてトマトと  
キュウリを見ましたんですけれども、それは日本と逆で  
ありまして、トマトは赤いよりか青いトマトを食べてい  
た。キュウリはまた逆で黄色なキュウリを食べて、漬け  
物にして、ものすごく酸っぱいということが記憶にある  
んです。

それから、先ほど作業のことでちょっと思い出したん  
ですけれども、零下四十度になれば作業中止をするとい  
うことで、五、六回はあったんですけれども、そんなに  
そう多くはないです。そういう配慮があったわけですけ  
れども、ほとんど強制労働といっても言い過ぎでないと  
私は思っているわけです。

それからあとは大体そんなことで、二十二年十一月に  
私は帰ってきましたんですけれども、私が帰った日か  
ら、当時鉄道省とはいっていただけなんですけれども、私も鉄

道省の方では十九年三月に現役で入隊するときには、休  
職として扱うということだったんですけれども、それか  
ら一回帰ってきましたして、一か月休養しまして復職でき  
たわけですけれども、向こうへ行っていてやっぱり非常に  
復職が遅かったために、給与的にも待遇的にも非常に損  
をしているわけです。復職できましたけれども、任官が  
非常に遅かったわけです。それから、給与が非常にひど  
くて、調整する機会も二、三回あったんですけれども、  
その資格対象者を一番低い人をもってこられたために、  
私が同僚よりも非常に低かったということでも非常に損を  
しているわけです。そういったこともまた抑留生活が災  
いしていたということがいえるんじゃないかと思うん  
です。

## 抑留を支えた左官屋の特技

熊本県 河津 太

—— 今から聞き取りを始めます。それでは、入隊か